

御国の福音

第7回：エレミヤ書と御国の計画（前編）¹

目次

はじめに p. 2

I. イスラエルの再統一（3:12-18） p. 3

II. イスラエルの悔い改めがもたらすもの（4:1-2） p. 5

III. 約束の地への回復（16:14-15） p. 5

IV. 人に応答される神（18:1-11） p. 6

V. 正義の王の統治（23:1-8） p. 8

エレミヤ書における御国の計画のまとめ p. 13

はじめに

A. 預言書と御国の計画

1. 「神の御国／王国」(the kingdom of God) の計画について学んでいる。御国の計画は、聖書を貫く軸である。
2. イザヤ書では以下のような御国の計画を学んだ。以下の要素は、エレミヤ書も含めて後の預言書で繰り返し語られている。
 - (1) ダビデの子孫から王であるメシアが来られる。
 - (2) メシアはイスラエルの霊的&物質的回復をもたらす。
 - (3) まずイスラエルと諸国民の罪に対する世界大の裁きがあり、それからメシアによる地上的王国が建てられる。
 - (4) メシア的王国では、イスラエル、諸国民、動物界も含め、被造世界全体が理想的な状態に回復させられる。
 - (5) 御国の計画が成就するためには、罪の問題が解決される必要がある。罪の問題は、メシアの贖いの御業によって成し遂げられる。

B. エレミヤ書について

1. エレミヤは南王国ユダの善王ヨシヤの治世(紀元前627年)に預言者として召され、バビロン捕囚直後(紀元前582年頃)までの約45年間活動した。
2. エレミヤの預言の内容
 - (1) ユダへの裁きの警告
 - (2) 諸国民への裁きの警告
 - (3) ユダと諸国民の希望の預言
3. エレミヤ書は、希望の預言よりも裁きの警告に2倍近い分量を割いている。
4. 「涙の預言者」による希望のメッセージ
 - (1) エレミヤの預言者人生は嘆きと悲しみに満ちていた。
 - (2) 「エレミヤは、モーセのように長い預言者人生を送り、人々による激しい抵抗に遭った。しかし、彼はエジプトから民を連れ出したモーセとは異なり、民によって約束の地からエジプトへ連れ去られてしまった。」²
 - (3) 本講義では、「涙の預言者」のメッセージの中心で輝いている、御国に関する預言を重点的に学ぶ。

I. イスラエルの再統一 (3:12-18)

A. 文脈とポイント

1. 文脈

- (1) 2章以降、南王国ユダの住民の罪に対する糾弾と、裁きの警告が続く。
- (2) 神は、北王国イスラエルの破滅を見てもなお悔い改めないユダは、さらに罪が重いと見なされた (3:6-11)。
- (3) 3:12 から、エレミヤはユダではなくイスラエルに向けて声を上げ、祝福の預言を語っている。
- (4) なぜエレミヤはイスラエル (北の 10 部族) に呼びかけているのか。2通りの理由が考えられる³。
 - a) 北王国の土地に残された少数の信仰者のため？
 - b) あえて北の 10 部族に呼びかけることで、ユダのねたみを引き起こすため？

2. ポイント

- (1) イスラエルはヤハウェに立ち返る。
- (2) イスラエルは再びひとつにされ、祝福される。
- (3) 祝福には約束の地への帰還とエルサレムの高揚が含まれている。

B. 解説

1. 12-14 節：イスラエルの回心

- (1) イスラエルに対する「帰れ」という呼びかけ (12 節) は、神に「立ち返れ」という呼びかけである (14 節；両者には同じヘブル語 *shwv* が使われている)。
- (2) 神に立ち返るということは、神に対する彼らの咎を認めることである (13 節)。
- (3) イスラエルが自分たちの咎を認めてヤハウェに立ち返ったとき、彼らのうちで生き残った者は、南王国の首都でありイスラエル全体の首都であったシオン (エルサレム) に再び集められる (14 節)。
- (4) イスラエルにおいて御国の計画が成就するためには、彼らが主に立ち返ることが求められている (参照：レビ記 26 章；申命記 4 章；30 章)。

2. 15節：ヤハウエの御心に適う牧者たち

- (1) イスラエルがシオンに回復される時、「わたし[ヤハウエ]の心に適う牧者たち」が与えられるという預言である。
- (2) 北王国は、不信仰な王たちや偶像に仕える偽預言者たちによって主の道から逸れ、裁かれた。
- (3) 回復される時、彼らにはヤハウエの御心に適った牧者たちが与えられる。

3. 16-18節：アブラハム契約の成就

- (1) 回復の時、イスラエルは約束の地で増え広がる（16節 a）。これはアブラハム契約の成就である。
- (2) 回復の時、もはや契約の箱が思い出されることはない（16節 b）。
 - a) 契約の箱の蓋（台座）は、民の間で神の臨在が現される場であった。
 - b) 契約の箱が思い出されないということは、イスラエルの回復の時、神がさらに直接的な方法で臨在を現されることを示唆している。
 - c) また、契約の箱はモーセ契約で定められたものであった。その箱が思い出されないということは、神と民の関係を定めるものがモーセ契約ではなくなることを示唆している（事実、エレミヤ書では後に「新しい契約」の啓示が与えられる）。
- (3) 回復の時、神殿の至聖所にある契約の箱の蓋ではなく、エルサレム全体がヤハウエの御座と呼ばれる（17節）。
 - a) これが成就する時には、諸国民が信仰をもってエルサレムに集められる。
 - b) イザヤ書 2:1-4 の内容と対応している。
 - c) イスラエルにおける御国の計画は、異邦人が主にあって祝福されるためのものでもある。
- (4) 回復の時、イスラエルは再び約束の地で統一される（18節）。
 - a) 約束の地が「彼らの先祖に受け継がせた地」とであると強調されている。

- b) この箇所におけるイスラエルの回復が、アブラハム契約の成就であることが強調されている。

II. イスラエルの悔い改めがもたらすもの (4:1-2)

A. 文脈と解説

1. 文脈

- (1) 3:12以降、イスラエルに対する悔い改め（回心）の呼びかけが続いている。
- (2) 3:12-18では、悔い改めによってイスラエルの再統一がもたらされることが約束されていた。
- (3) 流れを汲み取ると、ここでエレミヤは北の10部族とユダの民をあわせて「イスラエル」と呼びかけていると捉えた方が良さそうだ。

2. 解説

- (1) 1節の「帰る」は *shwv* であり、3:14の「立ち返る」と同じである。ここでは具体的に、偶像崇拜の罪からヤハウエに立ち返ることが求められている。
- (2) イスラエルが主に立ち返ることは、諸国民が主に立ち返ることに繋がる(2節)。すなわち、イスラエルの民族的回心は諸国民の祝福に繋がる。
- (3) イスラエルは主に立ち返ることによって、諸国民を祝福するという本来の役割(創 12:2-3；22:18 参照)を果たすようになる。

III. 約束の地への回復 (16:14-15)

A. 文脈と解説

1. 文脈

- (1) 2章以降、ユダの人々が裁かれることと彼らの回復が繰り返し語られている。

- (2) 16章でも、14節に至るまでユダの民の罪（11節；モーセの律法に対する違反）が糾弾されている。
- (3) 16:13では、ユダの人々が約束の地から追放されることが預言されている。

2. 解説

- (1) 「それゆえ、見よ、その時代が来る」（14節）
 - a) 「その時代が来る」（ESV: the days are coming）とは、エレミヤが終末論的な事柄を扱う際に頻繁に用いるフレーズである⁴。
 - b) モーセ五書からイザヤ書に至るまで、イスラエルは将来裁かれて約束の地から追放されるが、後に再び集められ、回復させられることが預言されていた。
 - c) 16:14、15では、ヤハウェがイスラエルをアブラハム契約で約束された土地に帰らせることが預言されている。
 - d) だからエレミヤは、裁きの預言（13節まで）と回復の預言（14、15節）を「それゆえ」という言葉で繋いでいる。
- (2) イスラエルにとって、ヤハウェというお方は圧倒的に「イスラエルの子らをエジプトの地から連れ上った」方である。
- (3) しかし、回復の時（その時代）には、ヤハウェは「イスラエルの子らを、……彼らが散らされたすべての地方から上らせた」方として認識されるようになる。
- (4) イスラエルの将来の帰還は、彼らにとって出エジプト以上の経験となる。

IV. 人に応答される神（18:1-11）

A. 文脈と解説

1. 文脈

- (1) ユダの罪の糾弾と、裁きに関する警告が続いている。
- (2) 18、19章では、エレミヤは陶器を用いた「たとえ話」によって、警告と回心の

呼びかけを行っている。

- (3) エレミヤは、イスラエルが今悔い改めるなら神は裁きを思い直してくださるというメッセージを語る。

2. 解説

- (1) エレミヤは主に命じられて陶器師の家に行った（1-3節）。
 - a) 陶器師は制作中の器を、自身の手で壊した（4節 a）。
 - b) 壊した器は、陶器師自身が気に入るほかの器に作り替えられた（4節 b）。
- (2) 神とイスラエルの関係が、陶器師と粘土の関係にたとえられている（6節）。
- (3) 陶器師である神は、ご自身がお作りになった器（イスラエル）を「打ち倒し、滅ぼす」権限をお持ちである（7節）。
- (4) もし民が神に立ち返るなら、神は彼らの上を下される裁きについて思い直される（8節）。しかし、民が神に立ち返らないなら、裁きを実行される（9-10節）。
- (5) 全ては神の主権の中にある。同時に、神は民のレスポンスを尊重され、そのレスポンスに応答される。
 - a) これは、神が予めすべてを定めておられるという真理を否定するものではない。両方を真理として受け取ることが重要である。
- (6) 主がお与えになったメッセージの中心は、「それゆえ、『それぞれ悪の道から立ち返り、あなたがたの生き方と行いを改めよ』』という点にある（11節）。
- (7) ここで教えられている真理とメッセージの強調点は、そのまま私たちの伝道の姿勢に適用することができる。

V. 正義の王の統治（23:1-8）

A. 文脈と解説

1. 文脈

- (1) 21章以降、ユダの王たちに対する叱責が続く。23:1、2はその叱責の締め括りである。
- (2) 23:3から、将来イスラエルが回復する時には、ヤハウエの御心に適う王が与えられるという希望の預言が語られる。

2. 解説

- (1) エレミヤ書において直接的にメシアに言及している預言は少ないが、この箇所はそういった預言のひとつである⁵。
- (2) 裁きを免れたイスラエルの信仰者たち（わたしの群れの残りの者）は、離散の地から約束の地（元の牧場）に戻される。彼らはそこで増え広がる（3節）。
- (3) 約束の地に戻されたイスラエルの上には、御心に適った「牧者たち」が立てられる（4節）。
 - a) エレミヤ書 3:15 の内容が反復されている。
 - b) イスラエルは回復されて以降、「二度と恐れることなく、おびえることなく、失われることもない」。
- (4) イスラエルが回復される時、ヤハウエは「ダビデに一つの正しい若枝」を起こされる（5節）。彼はイスラエルの王となる存在であり、ダビデ契約を成就させる存在である。
 - a) すなわち、彼はこれまで学んだ旧約の聖句でも待望されていたメシアである。
 - b) メシアはダビデの子孫であるから、人間である。
 - c) 同時に、メシアは「ヤハウエは私たちの義」と呼ばれる。よって、メシアは神ご自身でもある⁶。

- (5) メシア的王の希望と、イスラエルの回復の希望が結びつけられている(6-8節)。
- a) メシアが王として統べ治めることで、イスラエルは平和を経験する(6節)。
 - b) ヤハウエの御業として、出エジプトよりも離散の地からの帰還が思い起こされるようになる(7-8節)。この希望(16:14-15の反復)もまた、メシアの希望と結びつけられている。

エレミヤ書における御国の計画のまとめ

1. 南王国ユダはモーセ契約に不従順だったため、裁き(バビロン捕囚)を経験する。
2. 神はアブラハム契約への忠実さにより、イスラエルの民を集め、約束の地に回復させられる。イスラエルはその地で永遠に繁栄と平和を享受する。
3. 新しい契約は、イスラエルが霊的&物質的に回復させられることを保証している。
4. イスラエルの回復によって、諸国民の祝福ももたらされる。
5. 以上のことは全てアブラハム契約やダビデ契約の成就である。
6. エレミヤ書はイスラエルと諸国民に対する徹底的な裁きを宣告している。しかし、その中心には「神は必ず無条件契約を守られる」という希望のメッセージがある。

¹ 本講義は以下のテキストに基づく。Michael J. Vlach, *He Will Reign Forever: A Biblical Theology of the Kingdom of God* (Silverton, OR: Lampion Press, 2017), 179-91.

² Mark F. Rooker, "The Book of Jeremiah," in *The World and the Word: An Introduction to the Old Testament*, by Eugene H. Merrill, Mark F. Rooker, and Michael A. Grisanti (Nashville, TN: B&H, 2011), 380. 参照: エレ 43:6-7。

³ F. B. Huey Jr., *Jeremiah*, The New American Commentary (Nashville, TN: B&H, 1993), 74.

⁴ Charles H. Dyer and Eva Rydelnik, "Jeremiah," in *The Moody Bible Commentary*, eds. Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham (Chicago: Moody, 2014), 1131.

⁵ Walter C. Kaiser, Jr., *The Messiah in the Old Testament* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1995), 187-89; アーノルド・フルクテンバウム『メシア的キリスト論-旧約聖書のメシア預言で読み解くイエスの生涯-』佐野剛史訳(ハーベスト・タイム・ミニストリーズ出版部、2016年)83-85頁。

⁶ フルクテンバウム、83-85頁。なお、Kaiserは「ヤハウエは私たちの義」のより適切な訳は「私たちの義であるヤハウエ」だと指摘している(188)。